

## 木村洋

コロナという言葉が巷に溢れている。一昔前に近代文学研究者たちは社会学者と手を携えて、国民国家の犯罪性を口々に言い立てた。しかし今や国家による国民の監視と管理を人々はみずから求めてやまない。コロナ禍をきっかけにして人々が国家のありがたみを一齊に学習している様子をわれわれは目撃している。そのことは人文学での国家の扱いを長期的に変えていくかもしれない。

幕末、明治初期は文学史の空白地帯として処理される傾向にある。ここにも和歌をはじめとする文藝が息づいていたことを青山英正『幕末明治の社会変容と詩歌』(勉誠出版、二〇二〇年)は明らかにする。坪内逍遙『小説神髄』(一八八五年)が否定した勸善懲惡の(道徳的な)文學が幕末、明治の社會に根を張っていたという知見(そのようにここで明言されているわけではないが)が面白い。飛田英伸『明治十年代における小説の展開』(『日本近代文学』二〇一九年五月)はB・ディズレーリ著、関直彦訳『政黨春鶯団』(一八八四年)の文体の革新性を明らかにする。いつたに文体という問題だけで一つの充実した論文を書くのは難しい。それを見事にやり遂げたところに飛田の手柄がある。

する。文学者の感性と科学者の知性の幸福な結婚がここに実現している。この先加藤夢三という才能が順調に開花していくことを期待したい。横光については八原瑞里『横光利一「頭ならびに腹」論』(『日本文学』二〇一九年一二月)の鮮やかな考証も印象深い。西野厚志『燃え上がる手紙』(『日本近代文学』二〇一九年一月)は谷崎潤一郎の戦後最初の小説「A夫人の手紙」(一九四六年)を材料にして、検閲制度と谷崎の執筆行為の関連を探る。細かい考証と鋭い分析が爽快だった。

斎藤理生のここ数年の成果が『小説家、織田作之助』(大阪大学出版会、二〇二〇年)にまとめられた。筆者はつねづね斎藤の論文に尊敬を抱いている。斎藤の論文には平明で癖がない文、根気よく調べる姿勢、対象への愛情が揃っている。読み込み自慢も説教癖も左翼運動家臭もない。ただですます調に当惑した。康潤伊<sup>かんじゆい</sup>となりあう承認と排除』(『日本近代文学』二〇一九年一月)はヤン・ヨンヒ『朝鮮大学校物語』(二〇一八年)を分析する。一筋縄ではないかない在日朝鮮人をめぐる問題を際立つてわかりやすく伝える技量に感服した。

一柳廣孝『怪異の表象空間』(国書刊行会、二〇二〇年)は明治時代の怪談からポップカルチャーの妖怪まで、怪異をめぐる実にさまざまな現象を訪ね歩いていく。文豪の作品と人生に熱中することだけが文学研究ではないことを、この本

堀井一摩『国民國家と不気味なもの』(新曜社、二〇二〇年)

には実に新曜社らしい重々しさが漲っている。泉鏡花、桜井忠温、乃木希典、幸徳秋水といった話題の並びも新鮮である。

思想と文学を同一平面で論じる手腕が目を引く。服部徹也『はじまりの漱石』(新曜社、二〇一九年)は東京帝国大学での夏目漱石の講義の受講者たちの手書きの資料を使いながら、その講義と初期作品の関連を明らかにする。漱石研究にまだ豊かな鉱脈が眠っていることを、老練な文によつて教えてくれた。河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性』(鼎書房、二〇一九年)は実に丹念に佐藤春夫の言葉に向き合い、解釈に努め、周辺情報を調べている。人間を深く論じるには対象への「寛裕同感の胸懷」がなければならないとかつて徳富蘇峰は説いた(『人物管見』一八九二年)。河野の本はその見事な証明になつていて。中村ともえ『谷崎潤一郎論』(青簡舎、二〇一九年)は伝記的事実と作品の関連を探る先行研究との差別化を図りながら、谷崎潤一郎の表現の仕掛けを論じる。初期から晩年までの作品群を粘り強く見通す体力に感心した。平石岳『川村花菱と軍人たちの「不如帰」』(『日本文学』二〇一九年八月)は川村花菱の脚色になる徳富蘆花『不如帰』の特質を考える名作の上演史、受容史の面白さをよく教えてくれる。

加藤夢三『合理的なものの詩学』(ひつじ書房、二〇一九年)は横光利一を中心とする一九三〇年代の文学作品を分析

は情熱的に主張する。最近文学研究の文学研究が散見するようになつた。和田敦彦『戦時下早稲田大学の国文学研究』(『日本文学』二〇一九年九月)はその面白さを伝える好例である。二〇一九年一月二三~二四日に「ネオリベラリズム以後の文学研究」と題された近代文学の三学会合同研究集会があった。おもしろい試みだつたが、政治集会のような様子に少しとまどつた。二〇一九年一二月に大学共通テストの記述式試験の導入見送りが発表された。この問題のために奔走した紅野謙介をはじめとする心ある文学研究者たちに深く感謝したい。

近年の近代文学研究についてどのような傾向を指摘できるのか。はつきりしているのは作家論の人気である。他方、個別の作家を超える形で生じる、時代のうねりや社会のざわめきを俯瞰的に捉えようとする欲望は長らく衰退している。

俯瞰的な視野を備えた近年の人文学の成果として筆者が念頭に置いているのは、たとえば本田晃子『天体建築論』(東京大学出版会、二〇一四年)や島田英明『歴史と永遠』(岩波書店、二〇一八年)のような本である。近代文学研究の分野でもかつて笠淵友一『浪漫主義文学の誕生』(明治書院、一九五八年)という本があつた。そうした試みがより厚みを増していくれば、近代文学研究はさらに多くの愛好者を手に入れ、隣接分野との交流も活発化するのではないか。

アナホリッシュ國文學 第9号／日本文学総合誌

発行日：令和2（2020）年11月20日

編集顧問：林浩平

編集人：佐藤美奈子

編集室：〒171-0031 東京都豊島区目白2-27-9-1A

発行人：高橋哲雄

発行所：株式会社 警文社

〒064-0913 札幌市中央区南13条西13丁目1-15-103

TEL 011-790-8713 FAX 011-790-8714

E-mail kyobunsha011@gmail.com

振替：2720-4-44538

印刷所：モリモト印刷株式会社

定価：1800円+税

ISBN 978-4-877-99-909-4

©2020 by kyobunsha